

妊婦には安産鍼をする。妊娠を順調にして、妊娠中に起こりやすい腎障害を予防し、逆子などを予防する。安産鍼の要点は二点ある。  
①気が下腹（陰部）に集まっている正常な妊娠状態を保つ為、②腎臓機能を正常に維持する為である。

②から説明しよう。妊娠では羊水という多量の水をお腹に保つので、水分代謝に負担がかかるが、腎臓はそれに最も関係がある。妊婦を横に寝かせると、腰骨と肋骨との間（細腰）の背側を押さえると突っ張りが分かる。その突っ張りて異常が感じられる処が腎臓に通じるツボである。そこに鍼をする。

次に①である。正常な妊娠では胎児を育む為に気が下腹に集まる。それを保つのが要点である。その為、下腹つまり子宮に関連するツボである三陰交（足首内側）に気を補って下腹（陰部）の気を充実させる。気が上部（陽部）に偏っていれば、合谷（親指と人差指の付け根）から気を瀉して減らし、気がより陰部に多い状態を促がす。

カゼを引いたりすると、カゼとの戦いの為にノド周辺、つまり上部（陽部）に気が集まるので、当然、下腹（陰部）の気が減る。特に妊娠初期はカゼを引かない様に気をつける必要がある。カゼを引いてしまったら、ぐずぐずせずに、鍼灸と漢方薬ですみやかに対処しなければいけない。

逆子になるのは、正常位ではいられない子宮の環境があるからだ。病院では、それを「外回転」という強制的に外部から物理的に直す処置をする場合がある。これは西洋医学得意の「木を見て、森を見ない」対症療法である。子宮の環境が改善されなければ、また逆子に

なってしまう。子宮の環境を良くするには、子宮及びその周辺組織に十分に気を巡らせて、正常にすればいい。正常な妊娠状態を保つ安産鍼をすれば良いわけである。

妊娠予定日を過ぎて、出産がないと、自然なお産を望んでいても、病院側が不安になって、陣痛促進剤を飲まされたりする場合がある。実際、危険な場合もある。その時は催生の鍼をする。陰部の気を減らして胎児を抱え込んでいる状態を緩ませる。三陰交を瀉して、合谷を補う。安産鍼の逆である。

催生の漢方薬もある。特別なものではなく、婦人病でよく使われる桂枝茯苓丸である。江戸時代後期の漢方の大家・尾台榕堂が、「妊娠の臨盆に之を用うれば、催生にも効有り」と記している。

さて、「墮胎」とは穏やかでないが、その機会があった。胎児が腹中で死んでしまった妊婦が苦しんでいた。墮胎の鍼をした。これはつまり催生の鍼である。出なければ、手術の予定だったが、しない済んだ。墮胎の漢方薬もある。これも婦人病でよく使われる桃核承気湯である。桂枝茯苓丸よりも瀉す作用が強い。

安産の漢方薬もある。これも婦人病でよく使われる当帰芍薬散である。昭和の漢方の大家・荒木正胤は「安胎の妙薬」と記している。妊娠中に常用する。

妊婦の様々な不調の話を耳にすると、東洋医学が現代に活かされていないのを痛感する。8月末、出産する連れ合いには、漢方薬を持たせる。催生の必要があれば、桂枝茯苓丸を飲み、出産後は悪露の排出を促がす為に桃核承気湯を飲むわけである。(2009年6月芒種)

